
恋してめがね

時田一哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋してめがね

【Nコード】

N9027H

【作者名】

時田一哉

【あらすじ】

眼鏡が好き。眼鏡を掛けている人ばかりに目が行ってしまふ。『あの人眼鏡のセンスがいいなあ』『あの人自分に合う眼鏡を全然わかってないっ』『…あの人眼鏡似合わない…』『…私の運命の人は眼鏡を掛けている人だといいなあ…』これはそんな『めがね』が好きな女の子の物語

Prologue .

私は最近目の視力が悪くなってきた。

視力はなんと0.1以下らしい。

それで私は眼科で目の検査をして、眼鏡屋に行くと眼鏡のフレームを選び、そして最初にとった眼鏡を掛けた私は

眼鏡を掛けた自分を気にいってしまった。

Prologue・(後書き)

眼鏡は最高なアクセサリである!!!以上!!!
異常

第01鏡 : 憧れ

「このシャーペン沙希さきのдаро?」

「え?あ、うん。ありがとう智彦ともひこくん」

幼馴染の田辺智彦たなべともひこはアニメオタク。

オタクには結構つき物の度の強い黒ぶち眼鏡。

センスがまるで無いデザイン。

髪なんかボサボサしてて、制服も普段着もダラダラ。

いつからこんな風になっちゃったのかな…

「なあ沙希。今、俺に対しての失礼なこと、思ってたか?」

「え…?そ、そんなこと思ってたないよ」

やっぱり幼馴染だなあ…わかつちゃうのかな?

「…そうか。じゃ」

「うん」

「吉井よしさん田辺と親しかったっけ?」

後ろからいきなり声を掛けられた。

吃驚した…

「佐川さかさんでしたよね。そうですが…何か?」

「いやいや、他の人には敬語使ってるのに、敬語じゃないし…田辺

と話していたところなんて見たこと無かったから」

そっか…そう言えばそうだなあ…

「田辺たなべつてなんであんなにダサイわけ?」

「え…?それは…」

「やっぱり眼鏡?うん…髪?ってゆうか何あの雑誌、いっつも読んでるけど…アニメ雑誌だよな?あ、オタクだから?オタクっぽいオタクだよな。自分からオタクですって言ってる感じ」

「言いすぎです。そんなことないですよ?」

「じゃあなんで疑問系?」

「え…うん…」

私は眼鏡が好き。

眼鏡を掛けている人にすぐに目が行ってしまっ

でも智彦くんは別。

やっぱり…かっこ悪いからかな…

「あ…もうすぐでお昼休み終わっちゃう…私図書室行って本返して
こなきゃ…」

私は急いで図書室に向かった。

図書室は2階の1年の廊下の角を、曲がったところにある。

私は急いで曲がると誰かにぶつかって転んでしまった。

「きゃ」

いたた…あれ…痛くなかった…？

「邪魔だ。退いてくれ」

「え…あの…ごめんなさい…」

私は急いで退けた。

転んで相手を巻き込んでしまったらしい。

「ったく。小学生じゃないんだから廊下は走るな」

「す…すみません…」

私は今始めて相手の顔を見る。

「……………」

眼鏡を掛けた先輩だった。

しかも眼鏡が似合っていた。

「借りた本が遠くに飛んだじゃないか」

「すみません…」

「ったく…」

その人は本を拾ってため息をついた。

良い…すごくいい…

「本当にごめんなさい…私1年B組の吉井沙希です…あの…お詫び
を…」

「いらぬ。3年A組の及川敦^{おいかわあつし}。今度は気をつけるよ吉井」

眼鏡のブリッジを上げながら、そう言って去っていった。

その仕草…良いなあ…ものすごくいい…
そう思っていると、チャイムが鳴った。

「あ…予鈴鳴っちゃった…」

あの先輩いいなあ…

それから…なんか甘い香りがしたなあ…ものすごく美味しそうな

…

第02鏡 : クラス委員

…あの先輩眼鏡よく似合ってたなあ…いいなあ…

私はそう思いながら一日を過ごした。

そして帰り道、私はプリントを机の中に忘れてきたのを思い出した。

「いつけない…忘れちゃった…」

そう言いながら私は教室に入った。

すると教室に一人残っていた。

「あ…吉井さん。どうしたの？」

その人はクラス委員をやっている、西本真琴くんだった。

「え…あの…プリントを忘れてしまっ…」

「そっか。じゃあ早く取っていくといいよ」

「はい…」

実は私西本くんのことちょっと思っていたり…

私は急いで自分の机に向かうと、プリントを取って教室を出ようとした。

その時西本くんを見た。

すると散らばったノートを拾っていた。

私はすぐに手伝いに行った。

「はい。ここにもノート落ちてますよ」

「ありがとうございます」

「…いえ…」

私はちよつと嬉しくなった。

「ちよつとぶつかって落としちゃってさ…バカだよね僕」

「そんなことないですよ。私なんかしょっちゅう学校に忘れ物したりしていますから。大変なんですよ？他にもいろいろとドジしちゃいますし」

「そっか。大変だね」

…笑顔がいい…めがねスマイル…もつと見ていたい…
そう思ってしまった。

そして全部拾い終わって、彼は一息ついてからこう言った。

「本当にありがとう吉井さん。助かつちゃった。手出して」

「え…？あ…はい」

なんだろう…私はそう思いながら手を出した。

「はい。お礼のいちごキャンデー」

私の手にキャンディーが3つ転がる。

「……………」

「あ…甘い嫌いだった？」

…違う…嬉しい…すごく嬉しい…嬉しすぎてすぐに反応ができな
かっただけ。

「いえ、好きです。ありがとうございます」

「そっかよかった。嫌いだったらどうしようかと思っちゃった」

西本くんはにこつと笑いながらそう言った。

…キャンディーも好きだけど…西本くんも好き…

とは今の私では口が裂けても言えなかった。

その日の私は机に3つのキャンディーを置いて、指でツンツンい
じりながら西本くんのことを思っていた

第03鏡 : オタクの幼馴染

やだなあ…私ったらまたドジしちゃった…

私は今日お弁当を持ってくるのを忘れてしまった。
仕方がないので売店に買いに行った。

「ん…何がいいかな…」

結局何もなく、タマゴサンドを買った。

屋上のベンチに座ってゆっくり空でも見ようかな…

そう思っただけで私は屋上に行った。

ガチャリ…

そこには智彦くんが居た。

「ん？沙希か」

「……………」

「う…ん…よりもよって智彦くんか…」

「なんだよ」

「別に…」

智彦くんはベンチの上でアニメの雑誌を見ながら、ツイストパンを食べていた。

「俺だったから残念だったんだろ？」

「う…そんなんじゃないもん…」

「凶星だな」

「そんなんじゃないったらっ」

「沙希ってバカにされて悔しがるところとか、俺以外には見せないよな」

武彦くんはそう言いながら笑った。

「そう？」

「自覚してないのか」

「そうなのかなあ…」

「で…」

「『で?』つて?」

「何しに屋上来たんだ?」

そう言えばそうだった。

智彦くんとかうやっていっぱい話すのが久しぶりで目的忘れてた…

私は智彦くんと話すために来たわけじゃなかったもんね。

「お弁当食べに来たの…今日は空見ながら食べようかなあって…」

「そうか」

「そうかって、ベンチ半分座らせてくれないの?」

「座るのか?」

「座るよ」

「雑誌読みにくくなる」

「バカ」

私はイラっとして、ベンチをゲシゲシと蹴った。

「ちょ、おい蹴るな!わかったから蹴るな」

智彦くんはそう言って避けてくれた。

「ありがとう」

「はあ…」

「ねえ智彦くん」

「なんだよ」

「こっやって話すの久しぶりだね」

「そうだな」

「ってちよっとちよっとお…雑誌見ながら答えないですよ。そんなに

雑誌面白いの?」

せっかく久しぶりに長く話してるのに…

「面白いから見てるんだよ」

「雑誌見るの止めようよ」

「やだ」

む…

眼鏡のレンズ分厚すぎて、相手の気持ちわからないのかな…このアニメオタク…

「智彦くんなんかもう知らないっ！久しぶりに長く話せてるのに、ちゃんと話さないなんてっ！一緒の高校来ないほうがよかった！」
私はふいっとそっぽ向いた。

「すまん、悪かったって。今一番面白い記事読んでたからつい……」
「どんな記事？」

私はどんな記事が気になったので、智彦くんに近寄った。

智彦くんは2、3秒の間を空けて言った。

「これ」

「え〜？これ面白いの？声優さんのインタビュー記事？」

「面白いこと言ってるんだよ」

ちよつと私には理解出来ないなあ……どこが面白いんだろうっ……このインタビュー……

「よくわかんない……」

「そうか」

「でも智彦くんはアニメすごい好きなんだね。いつも読んでるし」
「そうだな」

それから結構アニメの話がされた。

私はそんな智彦くんからちよつと引いた。

でも……ちよつとアニメのこと理解できたかな……

「少し興味もったか？」

「もたないなあ」

「即答かよ……」

智彦くんはそう言って落ち込んでいた。

「普通そこはちよつと考えて、間を空けてから『もたない』って言うてほしい……」

「そんなに落ち込まなくても」

「アニメの面白さをわからないなんて……」

「わからないものはわからないんだもん……ごめんね智くん」

「智くん？」

「いいじゃない。幼馴染だし、呼び方ちよつと短縮したって。ね？」

「なんかだかなあ……」

「あ、智ちゃんの方がいい？私はこっちの方が呼びや」

「いやっ智くんがいい！！智くんをお願いします」

さすがに智ちゃんはないかあ……

だよね……この眼鏡でかつこ悪いし……

「うんわかったよ智くん」

あ……なんか智くんもギリギリだな……似合わないかも……

「ねえ、やっぱり武彦くんに直していい？」

「いまさらか」

「駄目かあ……」

第04鏡 : 本好きの先輩

そしてまた放課後、私は日直だったので遅くまで残って日誌を書いていた。

外はまだ帰る生徒でいっぱい。

私もそろそろ帰らなきゃ…

そう思って私は席を立って、日誌を机に入れて教室を出た。

そして図書室の前を通ると、中に人が居た。

…誰だろう…

私は思わずドアを開けた。

「誰だ？」

「あ、すみません…」

「なんだ、吉井か。どうした？」

そこには及川先輩が居た。

私の名前覚えていてくれた…

…相変わらず眼鏡が似合っている。

「いえ…特に用事は無いんですけど…」

「そうか」

沈黙…

「えっと…先輩って図書委員なんですか？」

「ああ、一応な。でも借りる人なんで全然来ない。めったに人が来ないからな。図書委員も俺ともう一人しか居ないし」

「そうですか…」

「そっか…私もあまり図書室来ないもんなあ…」

何か借りて行こうな？

「えっと…これお願いします」

「ん？ああ」

…物静かな先輩だなあ…

すごい本が好きそう…

「これ」

「あ、はい」

私は本を返してもらった。

沈黙…

「まだ何か用があるのか？」

「え…？えつと…何も…」

「そうか」

…沈黙…

う…なんか話が繋がらない…

図書室でちよつと本を読んでいこうかな…

つて…なんでこんなことしているんだろ…私…

それからどのくらい経つたんだろう…

私は結構座つて本を読んでいた。

「おい、吉井」

「え！？は、はい」

気がつくと、時計は5時で、図書室は電気がついていていた。

「もう外が暗いが、いつまでいるつもりだ？もうそろそろ玄関の戸が閉められるぞ」

「あ…はい」

私はカバンに本を入れて立った。

玄関に向かう間、しばらくの沈黙…

そして玄関に着いて外を見る。

わ…改めて見ると暗いなあ…どうしよ…

家の周りはあまり蛍光灯が立っていないくて暗い。

「家どこだ？」

「え……？」

「もう暗いから送っていく」

「え……でも……迷惑じゃないですか？」

「最近ここら辺で通り魔とか、変なものが居るだろう」

「……そうですね……じゃあ……お願いします……」

そして歩いている間も沈黙……つてつままない！

私から話をするしかないのかな……

えっと……

「せ、先輩って本好きなんですか？」

「まあな」

……え？それで終わり！？

話が続かない……

「どんなものを読むんですか？」

「文学、歴史ものそんな感じだな」

「そ、そうですね」

沈黙……

なんでこんなに話さないの……？

「先輩ってモテそうですね、彼女って居るんですか？」

つて、うわ……いきなりこんなこと聞いちゃうなんて……

「いない」

あ……居ないんだ……

「俺には、まだ必要ない」

「そうですね」

沈黙……

「……お腹空きましたね……」

「空いたのか？」

「へ？えっと……はい……ちょっとですけど……」

「そうか」

…沈黙…

なんか寂し…

「何か食べるか？」

「え？」

「俺の家もう近いしな。何かあるだろう」

「…はい」

先輩の家か…

「ここだ。ちよつと待ってる」

近い！！

「はい」

そして先輩は家に行った。

3分後。

先輩はシュークリームが4つ乗った皿を持って出てきた。

「これ。うまく出来なかつたものだが…」

「え？うまくって…先輩が今作ってきたんですか？」

「違う。昨日妹が作ってあまった物だ」

なんだ…違うんだ…

「ありがとうございます。嬉しいです」

やった。甘いもの好き！

「えっと…じゃあいただきます」

甘い…おいし…幸せ…

「…美味しそうに食べるんだな」

「はい。だって美味しいんですもん。甘いものも好きですし」

「…そうか」

あれ…？先輩照れてるのかな…？

なんでだろ…

「えっと…残り貰ってもいいですか？」

「持って帰りたいなら持って帰って良いぞ」

「ありがとうございます」

「どうせ捨てるものだったらしいから。お礼を言われることじゃな

「はい。でもあのゲームのプレイは
いい」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9027h/>

恋してめがね

2010年10月8日12時33分発行